

# WHAT

## ルーマニア・ブカレスト大学

生活科学部 人間生活学科  
生活社会学部 4年  
松田郁代奈

ルーマニアに交換留学と言うと、まず返ってくる反応が「何で!？」というものでした。ルーマニアを選んだのは私の専攻分野、そして卒論に関わる理由でした。私の専攻分野は障がい者社会福祉政策、そして卒論のテーマが、ボランティアと宗教の関係についてです。そこで、英語で社会福祉の授業が取れる大学を最優先にしました。

しかしながら実際にルーマニアに行き事が決まると、私以前に行った人がいなく、手続きから分からないことが多すぎ、ルーマニア入国1ヶ月前まで住むところさえもはっきりしない状況でした。ルーマニアに着き、始業式の日チューターの先生に所へ挨拶に行くと、「実はブカレスト大学での社会福祉の授業はルーマニア語でしかなく、英語で授業が受けられるのは社会学だけでしかもマスターコースの授業だけだけど、どうする？こちらとしては、留学生がいるのは大歓迎だけど」と言われました。このような感じで留学は分からないことだらけのことから始まりました。しかし、日本人学科の生徒の助け、クラスメイトの助けもありその後は学校生活、ルーマニア生活で困ることはほとんどなかったように思います。学校生活は、マスターコースの授業を受けていたので、毎日のように読む文献が多く、内容的にも難しいものが多かったです。しかし、授業中、授業後、またはメールでの質問や感想に教授は丁寧に答えてくれました。

私生活についてはとても恵まれていたと思います。そこには大きく二つの出会いがあります。まず、幸運にも在ルーマニア日本大使館職員の方に友人を介して知り合いができ、そこから日本人会の行事、大使館のイベントにも呼んで頂

き、そこでルーマニアで働く日本企業の方々、日本人学校の先生方と知り合うことができました。また、旅程でたまたま知り合った女性が私の興味関心と同じフィールド（障がい者支援）で働いていると知り、連絡先を交換しました。彼女との出会いが私のルーマニア生活をとっても充実したものにし、また、大きな支えとなりました。ルーマニア到着後、すぐに感じたのはルーマニア人の友人や知人に対する面倒見の良さです。その印象は留学が終わるまで一貫したものでした。帰国後、留學生活のことが忘れられず、そして様々なことに対して整理をつけられずにいました。私の大学生生活の一つの大きな目標は留学をすることであったからです。当たり前のことかもしれませんが、私のこれからの課題は留学を最終目標に終わらせずに、今後にどう生かしていくかです。そしてそのために、本当は望ましくないものではあるのかもしれませんが、私が留学中に無くしてしまったものを含め、そして、留学中に変化したこと、発見したこと、学んだことに向き合いたいと思います。留學中は留學の意味を探したり、留年して留學をしたことについて考えた時もありましたが、今ははっきりと留學してよかったと思っています。留學前から最後までサポートしてくださった、先生方、両親、友人に心から感謝しています。そして留學中に会った友人は何とも言えないほど本当にかげがえのない存在です。